

開催地名：岐阜県川辺町	
開催日時	令和2年2月4日（火） 9：40 ～ 10：30
開催場所	川辺町立川辺中学校
語り部	菅野 祥一郎 （岩手県陸前高田市）
参加者	川辺中学校生徒 約 200 名
開催経緯	町民全体的に災害意識への危機感が薄いととも、公助へ依存が高いと感じられるため、低年齢層を対象に、防災・減災の必要性を学んでもらい、ボトムアップを図りたいという思いから、中学生を対象に語り部の講演会を開催する。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は、岩手県の南端に位置し、すぐ隣は宮城県である。東日本大震災では津波の被害を受け、多くの人命が失われた。津波には３つの特徴があると言われている。１つ目は一度に多くの命を奪ってしまうということ、２つ目は、遠くまで流された人の遺体が見つからないということである。そして３つ目は、いつのまにか忘れ去られてしまうということである。大きな津波は毎年来るものではない。忘れたところに突然やってくる場所に怖さがある。 （２）避難について 地震が発生したときに所用で校外にいた私は、急いで学校に戻ろうとしたが、途中の橋が通行止めになり、想定外の時間がかかってしまった。戻った時、子どもたちや近隣の住民は校庭に整列していたが、既に津波は川を遡上しており、時間の猶予はなかった。私は、丸太の階段を使い、隣の山の上にある青いフェンスまで駆け上がることを指示した。 さっきまで校門付近にいた数十人の人たちは、私たちのそばから消えてしまった。校舎に逃げた人たちは、屋上の貯水槽の上に登れた一人の方を除き、流されてしまった。子どもたちが助かった理由は、そして住民の生死を分けたものは何か。それは、「誰よりも早く逃げることを決断したこと」に尽きる。 （３）避難所では 私たちの学校の子どもたちは全員が助かった。そして、何日か経ってどんどん家族の迎えが来た。食べ物は小さなおにぎり１個で、近くの冷凍工場から流れ出た冷凍秋刀魚を拾い上げ、焼いて食べたこともあった。不平不満を言う人は一人もいなかった。 みんなが一生懸命働いた。特に６年生と中学生が頑張っていた。そして、いたるところで家族や親戚、知人、友人との再会の光景が見られた。しかし、日が経つにつれ、お互いの無事を涙ながらに喜び合う様子は少なくなり、遺体との対面が増えていった。それでも、たくさんの行方不明者がいる中で、発見された人は幸運だったと言える。 避難所で生活していたある小学生には、最後まで誰も迎えに来ることはなかった。一人ぼっちで、どんな思いで家の人が見れるのを待っていたか、皆さんは想像がつくだろうか。そんな中で許せない出来事もあった。私が直接見たわけで

はないが、家族が瓦礫の中からようやく息子さんの遺体を発見した際、その横には、中身が全部抜かれた財布があったという。こんな状況の中で、なぜそんなことができる人間がいるのか。皆さんはそんな人間にだけはならないでほしい。

（４）皆さんへのお願い

皆さんに、以前教師だったという立場からお願いしたいことがある。それは「命を大事にしてほしい」ということである。まずは自分の命を、そして隣の人の命を尊重していただきたい。必死で逃げたのに、命が尽きてしまった少女がいる。彼女だけでなく、たくさんの若い命が一瞬にして奪われた。どんなに怖かったのか、想像しても、その恐ろしさや苦しさは私にはわからない。こんな恐ろしい災害が起こるなんて、だれが想像できたであろうか。

しかし、人生には思いもよらないことが起こる。災害は、いつ、どこで起こるかわからない。だからこそ、今、この時を大切に、生きていることの幸せをかみしめてほしいと思う。陸前高田市の人は、大切な人をたくさん亡くした。しかし、厳しい環境の中で、精一杯明るく前を向いて歩む人がたくさんいる。皆さんには自分の家があり、家族がいる。そして、自分の学校があり、学校には広い校庭があり、友達もいる。皆さんには当たり前のことかもしれないが、素晴らしいことであるということを認識してほしい。当たりの幸せを失った人たちのためにも、自分の家族や友達を大事にして、一生懸命勉強してほしいと思う。



開催地より

本日お話いただいた内容は、災害の凄さを我々にしっかり伝えるものであり、津波の恐ろしさ、命の大切さを強く感じさせるものだった。生徒の心に、しっかりと刻みこまれたことと確信している。